
東京マヨイガ

薙峰璃都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京マヨイガ

【Nコード】

N0729E

【作者名】

薙峰璃都

【あらすじ】

ひとを信じられず、ひとの心を怖れる沙慧。失うことを怖れて、手に入れることを怖れる竜。東京の夜にふたりは出逢い、惹かれあ
つていくが、各々の抱える痛みは消えない。

第I話 白い病院 沙慧

ひとは、仮面を被ることができる。心を偽ることができる。それに気付いてしまったから、ひとを信じることができない。ひとを、怖れてしまう。

仮面を信じて、^{ほんとう}真実が違ふことに気付いたら、血を流すのは自分だから。

失ったときの喪失感は、果てしなく重く、寒く、虚しい。

それを知ってしまったから、手に入れることが怖くなる。執着することが、怖くなる。

いつか失うのかと思うと、それがどれだけ、他人^{ひと}を傷つけるのかも知らないで。

こんな僕たちは、一体どこに行けばいい？

シンとした病室に、機械の微かなうなりが大きく響く。規則的に響く電子音、時計の秒針が動く音。それらが、この白い空間に、時の流れを教えてくる。

高村沙慧は、目の前のベッドに眠るひとを、じっと見つめていた。たかむら さえ眠るひとは、穏やかな顔をしていた。病院のパジャマに包まれた胸元が、僅かに上下を繰り返す。沙慧が立っているのとは反対方向にある右腕には、幾本かの管が繋がれて、その管は、ベッドの向こう側に密集している医療機械に繋がっていた。

沙慧は微動せずに、その寝顔を見つめる。制服のスカートの裾は、びくりとも揺れない。

医療機械の向こうにある窓はぴたりと閉ざされ、その白いカーテンが風を孕んでゆれることはなかった。

沙慧の吐息が微かに震えた。音にはせずに、このひとを呼ぶ。

おかあさん…

自分にはそう呼ぶ資格がないのだとわかっていても、呼ばずにはいられなかった。

このひとにもう一度、屈託無く笑ってもらいたい。心からの安らぎと共に、名前を呼んでもらいたい。穏やかに、他愛ないことを話し合いたい。

ふ、と沙慧の口元に、嘲るような笑みが浮かんだ。

嘲笑。自分への。

屈託無く笑ってもらいたいなど。

名前を呼んでもらいたいなど。

矛盾していると思う。

口元の嘲笑とは反対に、拳をきつく握りしめた。スカートの裾が、

ふう…とゆれる。

この状況を作り出したのは、自分なのに。

沙慧は嘲笑を掻き消した。

鮮やかに思い出せる。

暗い部屋、カッターの刃、震える声、何も感じていなかった自分。カーテンを閉め切り、常に薄暗かった部屋。

怯えを消し去るように握りしめていた、硬質に光るカッターの刃。部屋と廊下を隔てる扉の向こうから聞こえていた、懇願するような声。

感じることを拒否して感情を封じ、人形のように生きていた自分。その情景が次々に脳裏に浮かび、沙慧は目を閉じて、身体がバラバラになるような痛みに耐えた。

思い出す度に、身体が軋む。間接がバラバラになるような痛みが起こる。

そして、その痛みを伴って、浮かび上がってくる記憶。

躊躇うように開く扉。

扉の向こうに立っていた母は、突然泣き崩れる。

ごめんなさいと、それしか言葉を知らないように、繰り返し続ける。

そんな母に、自分は、

冷たい凶器を投げつけた。

「どうしてあなたが謝るんですか？」

その言葉は、「母親」という生き物に、どれだけの傷を負わせたのだろう。

その日を境に、母は

痛い。

痛い。痛くてたまらない。

どこが？ どこが。

沙慧は目を開く。

自分に、痛いと泣く資格はない。辛いと嘆く資格はない。

すべて、自分のせいなのだから。

泣くことは許されない。嘆くことも許されない。うずくまることも、目を逸らすことも許されない。

罪を背負って

ふいに、背後の病室のドアが開いた。息を呑む気配がする。

沙慧はゆるり、と振り向いた。

右腕に花束を抱えた女子高生が、立っていた。

女子高生は瞳いっぱい驚愕をたたえ、呆然と言葉を押し出した。

「…沙慧…」

紡がれたのは、自分の名前。沙慧は、女子高生を呼ぶ。

「…姉さん」

女子高生はその声にびくりと肩を震わせたあとで、スウと表情を削ぎ落とした。声も、温度を感じさせない。

「何してるの？」

沙慧は何も言わない。足下に置いてあった学校指定の鞆かばんを持ち上げ、踵を返す。

女子高生は、荒々しく病室に入ってくる。

「あんたにここに来る資格なんか、無いのよ」

知っている。沙慧はうつむき、唇をかみしめる。

病室の真ん中で、すれ違う。姉の鋭い視線が背を追いかけてくるのを感じながら、視線は合わせない。

「全部、あんたが壊した」

押さえきれない激情が滲み、姉の声が震えを帯びる。沙慧は黙って、敷居をまたいで廊下に出た。

「あんたさえいなければ、全部!」
ぱたん、と。

軽い音を立てて扉が閉まる。閉ざした扉に背を預けた。
病室の静寂になれていた耳に、姉の叫びの余韻がわんわんと鳴っている。

深く長く、息を吐いた。

姉の激情は、当然だ。

自分が壊したのだから。

姉の瞳と声を満たしていたのは、憎しみと怒り。激しい色を伴って、自分を刺す。

ふいに、部屋の中から話し声が聞こえた。沙慧は知らず息を詰める。

母が、目覚めたらしい。

…おはよう、美祢^{みね}。いつ来たの？

…おはよう、母さん…。ついさっきだよ…

…そう。何か、話し声がしたような気がするのだけど…

…ッ…。気のせいだよ…

…誰か来ていたの？ 誰？

……

…もしかして、沙慧？

……!

…沙慧!? 沙慧なのね!?

…っ母さん!

…なんてこと! 沙慧に謝らなきゃ!

…いいのよ、お母さん!

…ああ、沙慧! ごめんなさい!

…お母さん! 沙慧は、大丈夫だから!

…ああ、沙慧、沙慧、ごめんなさい! わたしが壊した!

…違う！ 壊したのは沙慧よ！
…ああ、沙慧！ごめんなさい、ごめんなさい…！

姉の泣き声がした。少しして、こちらに近づいてくる看護婦の足音に気付いた。ナースコールを押したらしい。

沙慧は身を起こすと、ゆっくりと廊下を歩き出した。

沙慧がまどついている名門中学・永明学園の制服に、微かに視線が集まってくる。それを遠くに感じながら、沙慧は次第に早足になる。廊下の突き当たりにあるエレベーターに乗り、一階について受付のある玄関ホールをまっすぐに突っ切ると、病院の外に出た。

途端に、排気ガスのおいが混じった外の空気がまわりついてくる。病院を囲っている並木越しに、大通りの騒音が聞こえる。僅かに目を細めて、沙慧は病院を振り返った。

『都立精神病院』

この、三階。
母が、いる。

沙慧は何か言いかけるように唇を小さく動かしたあと、黙って病院に背を向けた。

病院の一室に、春の柔らかな日差しが差し込む。窓の近くに据えられたベッドはひだまりになり、暖かい空間を作り出していた。けれど。

そのひだまりのなかに横たわった少女は、死の間近の苦しみに顔を歪め、荒い呼吸を繰り返していた。

少女の身体にはたくさんの医療器具がつけられ、口には酸素を送り込む透明なマスクが取り付けられている。それでも、最先端の医療技術は、この少女から死を遠ざけることはできなかった。

少女は一秒ごとに、死に近づいている。

水槻竜は、失うかもしれないという恐怖に吞み込まれて叫び出し、そうになるのを、必死に堪えていた。

竜の隣には、泣き叫びながら少女の名を呼ぶ女性がいた。

「栄！^{さかえ}逝^{みなつき}っちゃだめ！」

悲痛な叫び。女性は少女にすがりついて、少女を必死に呼んでいた。そんな女性の肩に手を乗せて、顔を歪める男性。

「……つ栄……！」

叫びを押し殺したような声は、確かに悲しみと苦渋と恐怖で満ちていた。

竜も、叫んだ。

「栄……！」

死ぬな。消えるな。

失いたくない。

頼むから。

「栄……！」

苦しむ少女を目の前にして、名前を叫ぶことしかできない。それが、歯がゆい。

医者たちの出入りがいつそう慌ただしくなる。機械の画面に映る

グラフが、乱れる。

竜は、布団の端から僅かに出ていた少女の左手を取り、握るだけではなく、抱き締めた。必死でこの少女をつなぎ止めるように。

「栄！」

何を言えいいのかわからない。

目を開ける、と言えいいのか。

死ぬな、と言えいいのか。

わからない。

わかるのは、自分はこの少女に死んで欲しくないということと。

この少女は、確実に死に向かっているということ。

ふいに、少女が目を開いた。

「栄！！」

三つの声が重なる。医者たちの視線が一瞬、集まる。

霞む視界に三人の姿をとらえた少女は、ふわりと微笑んだ。

その微笑みに、竜はぞくりとする。

この少女は。

生きることを、終えようとしているのか。死を、受け入れようとしているのか。

「栄！？ 大丈夫！？」

母親が少女にすがりつく。少女は、微かに唇を動かした。

あ……

り、が……

………とう………

竜は目を見開いた。

掻き抱いた手の温度が、下がっていく。

「栄！！逝くな！！」

抱き締める手の力を強くする。逃げようとするぬくもりをつなぎ止めるように。

少女は、自分の手を抱き締めている少年の姿を認めると、いつそう笑みを深めた。

父親の、押し殺すような叫び。母親の悲痛な声。

それらが、遠くに押しやられていく。

少女と竜。

少女は再び、微かに口を動かした。 竜だけに向かつて。

…す…き、だ…よ

竜は、喉から引き攣れたような音が出るのを止められなかった。

…りゅー…

父親の呻くような声と、母親の悲痛な叫びが戻ってくる。

少女はもう一度、三人を視界に入れると

目を、閉じた。

「栄……！」

声が引き攣るのにもかかわらず、叫んだ。

ピー…

やけに甲高い電子音。長く尾を引いて、病室の空気を無情に引き裂く。

竜は涙を流していることに気付かない。

母親が泣き崩れる。父親が母親を抱き締め、嗚咽混じりに少女の名を呼ぶ。

竜は、ぬくもりを失った手を抱き締めたまま、暫く動けなかった。

好きだよ。

竜。

あの少女が残した、柔らかく甘やかで、この上なく残酷なささや

き。

竜は白い天井を仰ぐ。

暫く、そのままの姿勢でぼつとすると。
意味のない音を、叫んだ。

好きだよ、栄。

今までも、これからも。

もっと早く、伝えられたならよかった。

今更伝えあつて、繋がつても。

もう一緒に笑うこともできないし、手を握りあうこともできない。

君は消える間際に、伝えた。

なんて、残酷な。

好きだよ、栄。

失いたく、なかった

*

竜は、ゆっくりと瞼を押し上げた。

肺の奥にたまっている重い空気を、ゆっくりと吐き出す。

右腕を持ち上げて、右手を天井にかざした。

もう、一年も前のことなのに。

あの時の夢を見る度に、胸の中には重いものが凝り、全身は鈍く軋む。

いや。

あの時の痛みは、忘れるわけではない。これから先、ずっと。大切だった。愛しかった。

あの時はまだ小学生だった。だから、「まだ子供なのにそんな大袈裟な」と、大人には言われた。

けれど、子供だから何だというのだ。

子供だからって、感情が軽いわけではない。大人ではないからといって、感情が偽りな訳でもない。

確かに、そう思った。

かざした右手をぱたりと落とし、ゆっくしと上体を起こす。両手の指を絡めて、組んだ手を額に押し当てた。

「栄……」

そつと名前を呟く。

はねもじさかえ
羽森栄。

春のひだまりのような少女だった。いつも柔らかく微笑んで、どこか儚い。

触れただけで消えてしまいそうで、抱き締めることができなかった。

とても大切で。どんなことをしても手放したくないと、この上なく執着していた。

けれど、失った。

失ったあとの喪失感果てしなく。その喪失感に呑み込まれていきそうで、怖かった。

喪失感に呑み込まれるぎりぎりのところに立っていたとき、ふと思った。

執着したから、こんなにも失ったあとが虚しい。

だったら、最初から執着しなければいいのだ。

手に、入れな

ければいいのだ。

もう一度、深く長く息を吐く。軽く頭を振ると、ベッドを出た。カーテンを開ける。

もうすぐ春が終わる。五月に入ればあっという間に梅雨が来て、その次にはもう夏だ。

竜は目を細めて空を見上げると、ゆっくりと部屋を出た。目尻に残る涙の跡には、最後まで気付かずに。

執着して、失うことが怖い。

だから、執着することが怖い。

なにかを、心から求めることが、怖かった。

第ⅠⅠⅠ話 罪と痛み 沙慧

大通りから外れたところに、沙慧が住む家があった。

都会にあまりそぐわない、広い日本家屋。門を通り、玄関まで続く石畳を踏む。庭も広く、松の木やちよつとした池が、趣味よく並んでいた。

沙慧は石畳の上で少し立ち止まる。ゆっくりと深呼吸した。

大丈夫。大丈夫。

そう胸の中で繰り返し、再び歩き出す。玄関の戸に手をかけ、ゆっくりと横にすべらせた。

がらがら……

少し重い音が響く。この音が聞こえないはずはないのに、誰も出てこない。

出迎えなど、この家に来てから一度もなかった。

沙慧は深く息を吸うと、学校指定の革靴を脱ぎ、のろのろと家にかかる。革靴は、靴箱の一番奥に入れた。

そのまま、まっすぐのびる廊下を少し歩き、自分に与えられた部屋にはいる。沙慧の部屋は洋室だった。ドアを閉めた途端、身体の強ばりが解ける。そのことで、自分が緊張していたことに気付いた。頭を振って鞆を投げ出すと、沙慧は制服のままベッドに倒れ込む。

沙慧が今いる家は、母方の祖母の家だ。もう沙慧と一緒に住んでいたくないと、美祢が姉が、泣いて祖母に頼み込んだ。祖母は可愛い娘の長女のためだと、二週間前に沙慧を引き取った。

けれどこの家でも、沙慧の居場所はなかった。祖母も、沙慧のことを忌々しく思っている。この家には母の姉、叔母夫婦とそのふたり息子も住んでいるが、叔母は婿を取り、姓を変えずに、母の旧姓でもある「竹本」を名乗っている。つまり叔母一家の姓は「竹本」だ。

「竹本」の中に、異色の「高村」がいる。

沙慧は常に息を詰めていた。竹本たちの白い目に耐え、従兄弟たちの好奇心が隠しきれない視線を堪えてきた。私物は極力自分の部屋に置いたし、靴やコートなども、一番奥や隅に入れるようにしている。

沙慧はベッドに横たわったまま、じつと自分の手のひらを見つめた。

最初は、少なからず憤っていた。何故自分がこんな扱いを受けなければいけないのかと、少しぐらい許されても良いではないかと。けれど、今ではそれが愚かだったと思う。

自分は、すべてを壊した。その罪が許されることは、無いのだ。すべて自分のせいなのだから、罰を受けるのは当たり前なのだ。泣くことも、嘆くことも、目を逸らすことも許されない。痛みと苦しみの中に晒されるのは、当然の罰。

ただ、独りで耐えて、堪えて、生きる時間が終わるのをじつと待つ。

それが、沙慧が自分に戒めた生き方だった。

沙慧は目を閉じ、長く息を吐いた。頭が重い。思考が闇に霞んでいく。

そう言えば最近、ろくに寝ていなかった。

そのことをふと思い出し、そのまま沙慧は意識を手放した。

*

泣き叫ぶ声。必死な声。子供の泣き声。

沙慧は、薄暗い部屋に慣れた思考を、ゆるゆると回した。

姉さん、父さん、佐織の声。そして、何かが甲高く引き攣れるような音。

三人の声は、尋常な声ではなかった。少なくとも沙慧は、今まで聞いたことがなかった。

お母さんの声が、聞こえない。

そう思い当たった瞬間、何故か身体が動いていた。

暫く自分から開けることの無かった部屋の戸を、おそろおそろ開ける。

途端に、三つの切羽詰まった声が大きくなった。引き攣れるような音は、耳に響き続ける。沙慧は目を瞠った。

この、引き攣れるような音。

この音は、お母さんの声？

心臓が、大きく震える。

何か。

わたしは、とんでもないことを。

沙慧はまるぶように部屋を出た。そのまま、声のするほう　　リ
ピングへ向かう。

一歩踏み出すことに、心臓の音は大きくなっていく。手のひらに汗が滲んだ。

沙慧はリビングの扉のノブを掴み　　ゆっくりと、開けた。

そのまま、沙慧は立ちすくむ。

髪を振り乱し、狂ったように泣きながら言葉になっていない音を叫び続ける母。母の姿に恐怖し、母に縋りついて泣き叫ぶ姉。酷く狼狽え、それでも母の名を必死に呼び続ける父。異様な光景に、声を上げて泣くしかできない幼い妹。

…これは。

身体が震え、立つことに必死になり、思考がぐちゃぐちゃになる中、妙に冷めている脳の一部分が考える。

…母は、壊れた。

母の狂気を宿した瞳が、沙慧をとらえる。母は、いつそう叫んだ。その引き攣れたような音の波は、かろうじて、ひとつの言葉に聞き取れた。

サエ、

ゴメンナサイ。

姉と父が、驚愕して沙慧のほうを見る。沙慧は、いっそう震えた。足が体重を支えきれなくなり、崩れ落ちる。呆然と、沙慧は叫び続ける母を見つめた。

冷めている脳が、残酷に告げる。

…母を壊したのは。

沙慧だ。

あの一言で。

母は壊れた。

姉と父が、沙慧を凝視する。沙慧はふたりの視線にも気付かずに、呆然と母を見つめる。

リビングには狂った母の声と、泣き続ける妹の声が響いていた。

精神崩壊。

母は精神病院に入院した。父の収入はすべて入院費に回るため、美祿は生活費をつくるために、睡眠時間も惜しんでバイトを始めた。高校が終わればすぐにバイトの場所に直行し、深夜零時を過ぎるまで働いてくる。朝は五時からの仕事のため、三時に起きて四時半に出発するという生活だった。

父はそんな美祿の負担を少しでも減らすため、一週間いっぱい仕事を入れ、毎日残業をして、少しでも多く収入を入れてきた。必然的に、家に帰ってくるのは美祿が漸く眠りについたすぐあととなる。

佐織は幼いながらも自分の家の状況を悟り、家では何も言わない子供になった。小学校であったことも何も話さずに、自分のことは自分でやる。朝早く夜遅い父、姉と顔を合わせることはなくなった。

高村家は、崩れた。

三人は沙慧を憎む。

沙慧が母を壊さなければ。

家族はバラバラにならなかったのに。

憎い。憎い。

沙慧が憎い。

沙慧は独りで呆然と、毎日を呼吸して過ごしていた。

お前のせいだ

お前さえいなければ

消えろ

消工口

消工口

憎い

お前さえ、いなければ
！

*

沙慧は目を開けた。身体が重い。

寝返りを打って、ぼうつと天井を見上げる。

もう一度目を閉じて、身体にたまっている重いものを吐き出すように、深く息を吐いた。

最近、こういう夢をよく見る。

嫌な記憶、痛む記憶。それらが「夢」という形を取って、鮮やかに再生される。

沙慧が最近眠れなかった理由のひとつだ。夢を見るのが怖くて、痛みが蘇るのが嫌で、眠れなかった。眠れば必ず、この夢を見る。

目を開けて、天井に向かって右手をかざす。

犯した罪、与えられた罰。どんなに逃れたいと思っても、逃れられない。逃れることは許されない。

頭の奥が鈍く痛む。全身が軋むような感覚がした。

それをやり過ごし、沙慧は焦点の合わない目で、まだ見慣れない天井を眺める。

そうやって生きていくしか、道はないんだ。

第Ⅴ話 初夏の日 竜

太陽が、ぼかぼかと窓から差し込んでくる。その心地よさにぼんやりとしながら、竜は一昨年の今頃に思いを馳せた。

栄を失^{さかえ}つて間もなかった頃。自分は部屋に籠もってみたり凶暴になつてみたり、情緒不安定だった。母親はそんな自分にどう接して良いのかわからずに、まるで壊れ物を扱うように、必要以上に気を遣つてきた。

今だって、母親は奇妙に気を遣い、変に優しく接してくる。情緒不安定だった頃は気にする余裕はなかったが、今になると、鬱陶しい。

自分は別に壊れていないし、正常なままだ。それをびくびくと怯えに近い感情を持つて接されるとイライラして、必然的に母親への対応は雑になる。母親はそのことに更に怯えて、よりいっそう丁寧に自分を扱う。

いい加減、疲れていた。

今は、母親との関係は微妙だ。食事は一応一緒に取るけど、目は合わせない。というか母親のほうがいっつもうつむいている。帰る時間はまちまちで、これといったコミュニケーションはなかった。けれど変化したのはその辺りだけで、あとは栄を失くす前。本来の自分に戻っているはずだ。明るく快活、礼儀正しく。無理して自分をつくっているつもりはないし、その必要も無い。

ただ、小学から一緒にの中学に上がってきた何人かの友達。いってもここはかなり高度な受験を受けないと入れないから本当にごく僅かだが、その何人かの友達は、母親と同じような対応をしていた。母親ほど酷くもないが、どこか気を遣われているのを感じた。

まあ、それもそうか。竜は苦笑を浮かべる。

栄を失くしたばかりの五年生初夏から半年ほどは、凄まじく荒れていた。授業をサボるなんてしょっちゅうだったし、掃除用具を入

れたロッカーを蹴ってへこませたり、滅多に使わない特別教室の窓ガラスを割ったりしていた。クラスメイトの大半からは敬遠され、教師たちからは激怒の視線を何度も向けられた。

そんなくらい、俺、栄のこと好きだったんだなあ。

うんうんとひとりうなずき、はたと、手元に人影が落ちているのに気がついた。

「え？」

今まで無意識のうちにしていた頼杖をといて、顔を上げる。

こめかみに僅かに血管を浮き上がらせ、頬をぴくぴくと痙攣させている老教師。

「…あ」

今が数学の授業中だったと、漸く気がついた。

バツと教室を見回すと、皆くすくすと笑っている。俺はいささか引き攣った作り笑いを浮かべ、わざとらしく声を上げた。

「あれー、先生。どうしたんですかーあ？」

ぴくん。

「馬っ鹿者！！ 授業の始めから今までボケッとしやがって！
今が何している時間かわかっているのか！！？ここは進学校じゃぞ！！ お前のようなものが何故受験に受かったのか、主任に伺いたいくらいじゃ！！！」

俺はへらりと笑う。

「えー、だってそれは俺が入試問題解けたからでしょ？」

ぶちん。

「馬っ鹿者ー！！！！！」

老教師は一発怒鳴り、手にしていた教科書で俺の頭を思いっきり叩くと、肩を怒らせて教卓へ戻っていった。

「…痛つてえ…」

叩かれた頭をさする。笑いは暫くさざ波のように教室内にとどまっていたが、老教師が再び黒板に図式を書き始めた途端、生徒たちはすっと表情を引き締めてノートに向かった。

竜もシャーペン握る。そして、ふと視線を廊下側の席にやった。廊下側の列の、後ろから三番目の席が、ぽっかりと空いていた。いつもあそこに座っているのは、高村沙慧という女子生徒だ。

常に感情を表すことなく、じつとそこに座っている。永明中の頭髮に関する規則は「髪を染めるな」程度だから、肩胛骨より少し下くらいまで伸びているサラサラの細い髪を、無造作に後ろに流していた。

何故か、印象に残っている。常に凪いでいる、けれど常に何かに耐えているように黒い瞳。

すべてを諦めているような無表情の下には、苦しみが渦巻いている。高村沙慧は自分と本質的に近いと、竜は何故か感じていた。話したことはないか、自分と彼女はどこか似ている。

だからこそ、それを見抜いた。

竜はくるりとシャーペンを回す。

高村沙慧は、確かに気になる。少なくとも、他のクラスメイトよりはずっと。

けれど、執着はしないと決めていた。

執着して手に入れようとしても、絶対にいつかは失う。

執着しても、良いことはない。

一日の授業終了後に、希望者だけが勉強する放課後学習会を終えて帰路についたのは、空が赤く染まり、影が長く伸びた頃だった。学生服の上からデイベックを斜めに肩にかけ、夕暮れに染まった道をのろのろと歩く。ふありとあくびを噛み殺した。

疲れた。今日母は仕事が遅く帰りは深夜になると、今朝ぼそぼそと告げていったから、家には誰もいない。とりあえず一眠りしてから、コンビニに向いて夕飯をすまそう。

そこまで考えてから、　　竜はぴたりと足を止めた。

すぐそこに、竜の住むマンションが見える。この小路からそのマ

ンションまでは、一定の間隔で電柱が立っている。

竜がいる場所から一本先の電柱に、こちらに背を向けてもたれかかっている人影があった。

影になっているが、それがすらりとした細身の、長身だということとがわかる。肩の辺りまでさりと伸ばしている髪。胸の辺りはつんと盛り上がっていて、腰は見事なラインを描き出していた。

そこらのモデルよりはよほど良い、女性にしては長身に非の打ち所のないプロポーション。

そんな女性を竜は、ひとりしか知らなかった。

思わず硬直してしまった喉をとりあえず震わせる。

「…榮^{えい}さん？」

人影は、その柔らかな線の肩をぴくんと動かした。

人影が電柱から背を起こし、ゆっくりとこちらを向く。

それから、竜に歩み寄ってきた。

顔は影に落ちていて、よく見えない。竜はもう一度呼びかけた。

「榮さんですか？」

竜に歩み寄ってくる人影。顔に落ちていた濃い影が、徐々に取り払われてゆく。竜はそれを、ぼんやりと見ていた。

夕暮れに染まった小路、鮮やかな金色を微かに残している空。ゆっくりと歩み寄ってくる、美しい人影。

映画のワンシーンに取り込まれてしまったようで、竜は動けない。人影の顔から、影が完全に取り払われた。身体の線にふさわしい美貌があらわになる。

「…竜」

形のよい唇から、竜の名が紡がれる。それにはっと我に返り、竜は慌てて、そのひとに駆け寄った。

綺麗だ。少女と言うには大人びていて、女性というには幼い。榮というこのひとは、少女のあどけなさや女性の妖艶さを持ち合わせていて、まるで名人の手による精巧な人形のようなだった。

「榮さん！ どうしたんですか？」

もう、眠気なんて忘れていた。狼狽^{うろた}えて、竜は榮に詰め寄る勢いで問いかける。

榮は、柔らかに微笑んだ。

「どうしたって…来ちゃった」

「…あのですね、榮さん」

答えになっていない答えに、竜は思わず額を抑える。

竜は、学年でも長身のほうだ。そんな竜と並んでも榮は背が高く、違いは二、三センチほどしか認められなかった。

榮は微笑みを浮かべたまま、小首をかしげる。竜は思わず大きく息をついた。

「…夜になれば逢えるのに…」

「…夜になれば、ね」

その声色に、竜はふと目を瞬く。

「…榮さん、あの季節ですか？」

榮は一瞬目を瞞ったあと、すぐにふわりと笑った。

竜はもう一度溜め息をつく。

榮には、別れた恋人がいるらしかった。本人は認めたがっていないが、榮は今でも恋人を想っている。

榮は、竜を弟のように気に入っていた。けれど、恋人と別れた時期が近づくと、ふいに榮は、竜に「男」を求めてくるのだ。表面はいつもと変わらずに慈しんでくれるけれど、指を絡めてきたり腕を組んだり、時には肩により掛かってきたり。竜はその時は、好きにさせるようにしている。どうせ一月後には終わるのだから。

榮の行動を甘んじて受け入れるのには、もう一つ理由があった。

けれど竜は、その理由に気付こうとしない。気付きそうになる度に、慌てて思考を別のことへと持って行く。

ふ、と、今も気付いてしまいそうになり、別のことを言葉にして押し出した。

「…今日は行くんで、大丈夫ですよ」

「そう？ …じゃあ、待ってるよ」

榮はにこりと笑うと、するりと身を翻し、小路の向こうに姿を消した。

竜は軽く頭を振り、再び戻ってきた眠気に抗いながら、もう一度マンションに歩き出した。

気付いてしまいそうになる。

それは、自分でも醜いと思ってしまうほど、浅ましい考え。
だから必死で、気付かないふりをする。

気付かないままで良いのだとは、思わないけれど。

第Ⅴ話 初夏の日 竜（後書き）

文章が稚拙で申し訳ありません。

けれどもここは、書きづらいけれども書かなければ次に（わたしが）進めないエピソードでして…。

駄文、大変失礼いたしました。次話からは、この文章よりはだいぶましになる予定です。どうぞご容赦ください。

第V話 どこかで 沙慧

沙慧はぼんやりと、天井を見上げていた。

今朝目覚めたら、酷く頭痛がした。それこそ、頭を持ち上げることにすらままならないほど。

あまり言いたくはなかったが、祖母に言わなければ学校に連絡は回らない。倒れそうになるほどの激しいめまいにくずおれそうになりながら、必死で部屋のドアを開けた。

その、部屋のドアを開けた丁度そこに、沙慧と同一年の、従兄弟の兄のほうがいたのが幸いだった。従兄弟は沙慧の様子に軽く眉を上げ、祖母を連れてきてくれた。

声をつつかえながら旨を伝えると、祖母は不機嫌そうに眉をひそめながらも、学校に連絡しておくと言ってくれた。可愛い孫の手前もあつたのだろう。沙慧は、従兄弟がいてくれたことに感謝した。

そして祖母の了承を取り、もう一度部屋に戻って横になり、その途端、嘘のように頭痛がひいていったのだ。

沙慧は驚いた。頭が砕けるかと思うほどの痛みも、気持ち悪くなるほど揺れていた視界も、あっけなく無くなったのだから。

沙慧は一瞬、祖母に伝えて学校に行こうかとも思ったが、やめた。あの祖母がどんな反応をするか、目に浮かんだからだ。

沙慧は閉じた瞼の上に右腕を乗せ、全身の力を抜いた。

疲れたのか、と思う。

精神でどうごまかしていても、精神的疲労は肉体に影響を及ぼす。精神でどんなに虚勢を張り、ごまかして耐え、堪えていたとしても、身体は正直なのだ。一定の量の疲労がたまると悲鳴を上げ、症状を出す。今日は休めると知ったから、症状を納めたのだろうか。

たまには良いか、とふと思ってしまった自分を、間髪入れずに叱責した。

本来なら、休むことも許されないのだ。

けれど、身体は正直で、疲労を少しでも消そうと瞼が重くなる。沙慧は抵抗するだけ無駄か、と思い、少しだけ、と目を閉じた。

*

どこかで、誰かが泣いている。

声を出すことなく、無表情なままで、泣いている。

まるで、自分自身にすら気付かせまいとするように。

タスけテ

助けて

たスけて

つかれた

つかれタ

疲れた

もう、

ゆるシて

ユるシて

赦して

“ 赦されるわけがない ”

“ 赦されることなど無い ”

“ 消えない罪 ”

“ 許しを望むなんて、あつかましい ”

わかってる。それでも、許しを望まずにはいられない。

救って欲しい。

誰か。誰か。

息が詰まる。呼吸ができない。
生きて、いけない。

全身に突き刺さる憎悪、嫌悪。

全身で感じる拒絶、否定。

どこに行けばいい。どこに行けばいい。

どこで生きればいい。どこで。

ここじゃない、どこかで。

どこ？

泣いているのは

*

頭痛は去ったはずなのに、頭の芯が鈍く重い。沙慧はゆるゆると
瞼をあげた。

ぼんやりと視線を巡らせる。部屋が、赤い。

…赤い？

夕方だった。

沙慧は思わず、上半身をガバリと起こす。

寝付いたのはたぶん、午前八時前後。今は、午後六時。十時間も
眠っていたことになる。

沙慧は目を睜り、その途端、目尻に走った張るような感覚に
驚いた。

まさかと思い、目尻に人差し指を這わせる。僅かに、濡れたよう
な感覚があった。

泣いていた。

なるほどだから目覚めたとき頭が重かったのか、などと考えなが
ら、沙慧はぼんやりと、微かに濡れた指先を眺めた。

泣いていた。一体、どのくらいぶりだろう。

少なくともあの薄暗い部屋に閉じこもる一ヶ月ほど前からは、泣くことも忘れていた。

薄暗い部屋に閉じこもる一ヶ月前。 閉じこもる原因となったことが、起こった時。

あれは例えるなら、今まで表だと信じていたコインの面が、裏だったことを知ったような。

あの瞬間感じたのは、まず衝撃だったと思う。

それから、絶望、恐怖、怒り。そして、人間への不信感。

ひとの発する言葉すべてが、信じられなかった。

ひとが笑顔を浮かべながら紡ぐ言葉。自分に向かって言葉が紡がれた時、心の中で問い返し、疑った。

それは、あなたが本当に感じていること？

この言葉には、本当に偽りはない？

裏では罵^{のの}り、嫌悪しているのではない？

これは、わたしを信頼させるための嘘かもしれない。わたしをほめている裏で、嘲っているかもしれない。

そう考えると、何も信じられなくなった。

人は心を偽れると、気付かなければ、信じていられたのに。

純真にひとを信じて、ひとと寄り添って、交流を深めて。そう言う理想的な生き方が、できたかもしれないのに。

気付いてしまった。

ひとは、心を偽れる。

母さんのように。

そう思ってしまった、沙慧はこくりと唾を呑んだ。

違う。母さんは、偽ってはいなかった。

そう自分に言い聞かせる。だって、本当に自分を憎んでいたら、自分が暗い部屋に閉じこもった時、喜ぶはずだ。母さんは、泣いて謝ってきた。

だから、母さんは偽ってない。

そう理性で言い聞かせる。それなのに、どこかがそれを否定する。

違う。母さんは、どんな形であれ偽っていた。

だって、裏切られた。信じていたのに、裏切られた。

母さんが自分のことをあんなふうに思ってたなんて、知らなかった。

裏切られた。裏切られた。

母さんは、わたしを裏切った。

だって、わたしは傷ついた

「ッ！」

沙慧は硬く目をつむり、頭を振った。

駄目だ、駄目だ。

何が駄目なのかわからないけれど、駄目だと感じた。

顔が歪む。

息が苦しい。

息が詰まる。呼吸ができない。

生きて、いけない。

沙慧は静かな息苦しさを払拭したくて、ベッドから抜け出し、窓に歩み寄った。酸素を求めるように、窓をいっばいに開ける。

あえぐようにして呼吸する。呼吸が、浅くなる。

酸素が足りないような感覚に陥って、視界が霞み始めた。微かに暗くなった瞼の裏に、ふと、家族の顔が浮かんでくる。

姉の目。父の目。妹の目。祖母の目。従兄弟の目。叔母の目。すべての目が憎悪や嫌悪をいっばいにたたえ、睨んでくる。

ふいに、目が眩んだ。

全身に突き刺さる憎悪、嫌悪。

全身で感じる拒絶、否定。

どこに行けばいい。どこに行けばいい。

どこで生きればいい。どこで。

ここじゃない、どこかで。

どこ？

「ここじゃない…」

荒い呼吸の中、掠れる声で呟いてみる。

ここじゃない、自分の居場所。誰も自分を知らない場所のなら、罪に縛られることなく、生きていけるかもしれない。けれどそんなところ、自分は知らない。

ふと、明かりの灯り始めた東京の街が見えた。

沙慧はその明かりを、ともすれば霞みそうになる視界で、ぼんやりと見つめる。

西の空はいつしか赤からくすんだ藍色に変わり、東京は夜を迎えようとしている。

東京の夜は、虚しさすら感じるほど強い明かりに彩られる。けれどその分、ネオンの当たらない場所の闇は、目が潰れるかと思うほど濃い。

夜の、東京。

沙慧は今まで着ていたパジャマを脱ぎ捨てた。

部屋の隅にあったロッカーを開き、ハンガーを素早くずらしていく。

三分の一ほどをずらした時、沙慧は手を止めた。

薄いレモン色の、ノースリーブのワンピースがあった。沙慧はそれを手に取る。

久しく着ていないものだった。沙慧はそのワンピースに身を通す。老人会の温泉旅行で、祖母は向こう一週間留守になるはずだ。従兄弟たちは部活、叔母夫婦は残業で帰りは遅くなる。早めに帰ってきて、わざわざ異質な「高村沙慧」の部屋をのぞいたりはいらないだろう。

レモン色のワンピースは、沙慧の細身の身体によく映える。

沙慧は、タンスの一番下の引き出しに入っていた、白いサンダル

を取り出した。

サンダルを履いて、窓の縁に、外に足を出して腰を下ろす。街の明かりがよく見えた。

夜の街なら、生きていける気がした。

誰も自分のことを知らない、乾いた街。華やかな街。

ひとと、出会ったかと思えばすれ違っていく街。

沙慧は大きく深呼吸する。

そしてそのまま 窓の外へと飛び降りた。

東京の街へ。

第Ⅴ話 どこかで 沙慧（後書き）

漸く、ここまで辿り着けました。

次の話でようやく、沙慧と竜が絡む予定です。

物語が展開するはずなので、どうぞよろしくお願いします。

第Ⅴ話 ふたり

遠くで車のクラクションが聞こえる。月も星も見えない、真つ黒な空。鮮やかなネオンがあちこちに浮かび、夜の空気を彩っている。沙慧はぼんやりと、夜の東京を歩いていた。

交差点の信号が赤だ。沙慧は足を止める。

夜なのに、人が多い。駅からたくさんひとが吐き出され、その人たちは、横断歩道の向こう側にたまっていく。その間も、駅はひとを呑みこみ、吐き出す。

信号が、青に変わった。

皆が一斉に歩き出す。皆同じような顔をして、人の波に流されるようにして歩いていく。沙慧も、歩いた。向こう側にいた人々も、一斉に歩いてくる。

二つの人の塊がぶつかり合い、砕けた。それでも人々は進行方向を変えずに、誰かと向かい合ってはすれ違っていく。

沙慧も人の波に押されるように、ふらふらと歩いた。剥き出しの二の腕が、少し寒い。

スーツ姿の男性に女性、制服姿の高校生、塾の名前が入った鞆を背負う中学生、部活帰りの学生、地味な服を着て急いでいる女性、派手な服装で髪を染めている女子高生、幸せそうに頬を染めて歩く若い男女。

皆一様に、すれ違う人たちのことを気にも止めない。長い髪とそれを梳く櫛のように、一瞬ふれあっては離れていく。

横断歩道を渡りきり、人の流れから抜け出した。沙慧は辺りを見回す。

知らない顔だけが往来する。沙慧を知っているひとは、一人もいない。

沙慧の罪をとがめるひとは、誰もいない。

沙慧は微笑みを浮かべる。

と、その目を軽く見開いた。

漆黒の夜空。きらびやかな明かりをまとった高層ビルの間を縫うようにして、赤い風船がふらふらと空を泳いでいた。

沙慧は瞳で、風船を追っていった。

風船はふよふよと、頼りなさげに飛んでいく。やがてそれはビルがびっしりと生えた駅の周辺を抜けて、どこか妖しい店が密集しているところの上空へ入っていった。

その店たちがなんなのか、沙慧でも知っていた。
色街。

けれど、何かが囁いた。

追いかけてみようか。

沙慧はふらふらと歩き出す。

ひとと擦れ違い、人の波にもまれて、沙慧は風船の行った方へ行ってみる。

風船を追いかけている、というのは言い訳だと、沙慧もわかって
いた。

ただ、行ってみたいのだ。

そして、あそこへ行ったらどうなるのだろうと。

信号が赤になる。足を止める。

この横断歩道を渡れば。

だんだんひとがたまってくる。車の排気ガスがうるさい。電光掲
示板では何かを宣伝していて、めまぐるしく色が変わるライトが目
に痛かった。夜の冷気が、ひとの熱気に紛れていく。

向こう側にもひとがたまり始める。携帯をいじっているひと、神
経質に腕時計を気にするひと、重そうな鞆を肩にかけ、顔をうつむ
かせているひと。

この人たちひとりひとりに、何があったのかは知らない。知る必
要がない。

信号が青に変わった。

せき止められていた水が一気に解放されたように、人の波が動き

出す。沙慧も、その人の波に合わせて動く。

人の塊がぶつかって、砕ける。さっきと同じ。

そして、さっきと同じように、ひととすれ違っていく。

人の波。人の群れ。ネオンの光。熱気。

すべてが渦巻いて、意味のないものになっていく。すべての理由が、わからなくなってくる。

横断歩道の中央にさしかかる。

右腕に、硬い感触を感じた。

最初は手がぶつかったのだらうと思い、右腕を軽く動かした。けれどその感触は、沙慧の手首をとらえて放さない。そのことで、この感触は確かに沙慧を掴んでいるのだと知る。

「……え？」

沙慧は思わず足を止め、声を漏らした。

＊＊

竜は、白のＴシャツにジーンズというラフな格好で、ぶらぶらと東京を歩いていた。

目的地はひとつ。そこで、榮が待っている。

ジーンズのポケットに手をつ込みながら、竜はぐるりと街を見回した。

東京の街。竜はいつもこの街は、どこか乾いていると感じる。

慌ただしく時間が流れ、人々は他人に関心を持たず、ひととひとはすれ違うだけ。時計の針に急かされて、乾いた時間が流れるだけの空間。

乾いている。けれどこの街に住んでいる人間は、乾きを訴えるこ

とはない。

慣れているからだ。乾いた時間が急いて流れ、ひととすれ違うだけの生活に、慣れている。

竜は地方で生まれ、小学三年生まで過ごしたあと、四年生進級を前にして東京に越してきた。引越してきたばかりの頃、流れる時間の速さに愕然とした記憶がある。

この街では、青い空をぼんやりと眺めることも、水に手をつけながらその冷たさを全身で感じることもしないのだろう。意味のないことはしないのだ。

この街に来て四年目だが、実を言うと、今でも居心地が良いとは思えない。

交差点。横断歩道を渡ろうと思ったら運悪く信号が赤になる。小さく舌打ちしながら、竜は足を止めた。

向こう側にも、だんだんとひとがたまってくる。

排気ガスのにおい。ひとのざわめき。車の走行音。めまぐるしく色の変わるネオン。どこかで上がる女子高生の嬌声。ゲームセンターの喧しい音。

すべてが混ざって、混沌とした空間を作り出す。

竜は大きく息を吐き出した。

信号が青になる。両手をポケットから出し、右足を前に出す。

向こう側から来る人の塊とぶつかる。できる限りよけながら、それでもよけきれずに人の肩と軽くぶつかる。

それを何度か繰り返し、交差点の中央にさしかかった。
と。

目の前に現れた、ひとりの少女。

竜は目を睜った。

レモン色のワンピース、白い腕、長い髪、きゃしゃ華奢な身体。
それが誰だと認識する前に、腕が動いていた。

左腕が動く。すれ違う瞬間、華奢な少女の右手首を、掴んでいた。自分の行動の意味がわからない。衝動だ。

少女は軽く腕を動かしたが、自分の手首を包んでいるものが、意図的に握っている人の手だと気付いたのか。少女の口から、声が漏れた。

「…え？」

＊＊

沙慧は自分の右手首に目をやった。少し骨張った、少年の手。その大きな手のひらが、自分の手首を掴んでいる。

沙慧はゆっくり、大きな手から腕、肩、首へと、視線をずらしていく。

竜は沙慧の手首を掴んだまま、沙慧の瞳の動きを見つめる。

沙慧の瞳が、竜の顔にたどり着く。

ふたりの視線が、出逢った。

第VII話 夜に

都心の街の横断歩道。漆黒の空を頭上に、人々はせわしなく歩いていく。

横断歩道には途切れることなく人が流れ、ひととひとは擦れ違いを繰り返す。

そんな人の波は、横断歩道の中央を避けるようにして、ぱっくりと割れていた。

割れ目の中心にいるのは 少年と少女。

少年が少女の右手首を左手で掴み、少年が少女を引き留めているような格好だ。少女は少年を驚いたように見つめかえす。

ある人は興味深げにふたりを眺め、ある人は面白そうにニヤつき、ある人は迷惑そうに眉をひそめ、ふたりを避けて歩く。

沙慧はそんな周りの視線に気付かず、もう一度声が漏れるのを止められなかった。

「…え？」

竜も、自分の行動が不可解だというように、困惑した表情で言葉を紡ぐ。もうひとつ、握った手首のあまりの細さに、少なからず驚いていた。

「…高村、だよな？」

沙慧は目を瞠った。そしてふいに、思い出す。

中学の教室。

窓際の席。

学生服。

春の終わりになると必ず、ぼんやりと外に視線を投げている。

何かを懐かしむように。

「…水槻、竜…くん…？」

竜は呆然とした沙慧の瞳を見ながら、困惑しつつも素早く考えを巡らせていた。

沙慧の来た方向から横断歩道を渡りければ、竜の住むマンションがある住宅街、どこかの事務所のオフィス、流行りの洋服をそろえたショップが主だ。あとは某商事のビル、人の出入りが滅多に見られない興信所。マンションのそばで沙慧を見たことはなかったし、オフィスやビル、興信所に行くような年齢ではない。そしてこの高村沙慧は、流行りの洋服に興味があるとも思えなかった。

そしてそれ以外といったら、まっすぐ行けば色街のある小路。まさか。

「おまえ……」

思わず問い詰めようとしたとき、酒のにおいが鼻をついた。

「よっ、若いねえ兄ちゃん姉ちゃん！」

かなり酒を飲んだあとだとわかる、赤ら顔をした中年男性がふたり、よろよるとすぐそばを歩いていった。そのうちひとり、甲高い口笛を吹く。

「青春かあ！？大いに結構結構！」

下品な笑い声を上げ、二人組は通り過ぎていく。そこで竜は顔を上げ、信号が点滅し始めていたのに気付いた。横断歩道の真ん中に、竜と沙慧だけが取り残されている。

とりあえず信号を渡りきろうと、竜は沙慧の手首をきつく握ったまま、歩き出した。

「え……ッ」

沙慧は一瞬抵抗のための力を入れたが、同年代の男子の力に敵うわけがなかった。さっき歩いた道を再び戻るようなかたちで、竜に引っ張られる。二、三步まるぶように足をもつれさせたあと、僅かに駆け足を混ぜながら、竜の後ろをついて行く。

途中後ろを振り向いた。風船は、もう見えない。

再び前を向き、握られている手首が妙に熱を持っているのに気付いた。

（そつえば……）

他人に触れられるのは、久しぶりだ。少なくとも、悪意を持たな

いで触れられるのは。

とくり。

身体の内側が、震えた。しびれに似た感覚が、指先まで駆け抜ける。

こんな感覚は、忘れていた。

忘れていた感覚が、感情が、次々と呼び覚まされる。

めまぐるしいその変化に沙慧はほんの少し怯えながらも、何故か嫌ではなかった。

*

竜は自分の行動に戸惑いながらも、とにかく人の多い通りを抜けた。

沙慧の細い手首を握ったまま闇に落ちた小路に入る。闇は音を吸収してしまうのか、その小路に入った途端、街の喧騒がずっと遠のいた。薄いガラスを通したようだ。それでも微かに、笑い声や車の走行音が聞こえてくる。

街灯がぼつぼつと点在する小路を少し行くと、児童公園があった。とりあえず竜はその公園に入り、ベンチに沙慧を座らせる。

沙慧は手首を包んでいたものが消えたことに少しの間微かな違和感をおぼえ、右手首を左手でス、となぞってみた。

なぜかくすぐつたい。手首ではなく、体の芯が。

竜はふうと息をついて、腰を伸ばすように空を仰いだ。ちらりと沙慧のほうを伺い　そして、驚く。

沙慧の唇が、僅かにほころんでいた。本人は気付いていないらしく、竜が思わずその顔を凝視してしまっているのにも気付かない。

へえ。

竜は思う。

こいつは、こんなふうに笑える奴だったのか。

沙慧は、学校では一度も笑っていない。ただ堪えるような目をして、じっと授業が終わるのを待っていた。息を詰めるようにして、誰とも目を合わせずに。たまに教師に指されれば正しい答えを淡々

と呟くものだから、クラスの女子の一部に反感を買っていたが、沙慧が纏^{まと}うその異質な空気に押され、誰も何もしていなかった。沙慧を遠巻きに見るだけで。

結構笑い顔、可愛いじゃん。

そんなことをふと思い、なぜか顔を赤くなる。なぜだろうと考えて、気障^{きさ}な男のようなことを考えたのが恥ずかしかったのだと思い当たった。それでまた顔を赤くする。

「水槻くん？」

名前を呼ばれ、ハツとした。沙慧のほうを見る。

沙慧は、本当に微かな困惑を浮かべ、喉に引っかかるような言葉を紡ぐ。

「あ、何？」

「…なんて呼べばいい？」

沙慧は、困惑している自分に驚いていた。

いつも、冷静でいた。困惑する必要などひとつもなかったし、言葉を選ぶ意味もなかった。

今日の自分は、どこか変だ。

竜は一瞬拍子抜けした。

このひとが、そんなことを気にするようなタイプには見えなかった。

「…あ、別に何でも。水槻でも竜でもタツでも…」

沙慧たちの学年には、竜という名前の生徒が二人いる。竜はごく一部の生徒からは、区別するためにタツと呼ばれていた。

竜は何となく二の腕をさすった。そのことで、今が夜だと思い出す。公園は薄闇に落ち、街の喧騒が遠くに聞こえる。街とは反対のほうから、冷たく冴えた風が流れてきた。

「…あ」

そうだ。自分はいいが、高村沙慧は、こんな時間に外に出ていて良いのだろうか。

「高村？」

「なに？」

沙慧は竜を見上げる。細い髪がさらりと揺れる。綺麗だなと思ってから、竜は言葉を口にした。

「こんな時間に、大丈夫か？ 家に帰った方が…」

竜は続けようとした言葉を飲んだ。

「家」という言葉が出てきた途端、沙慧の瞳が目に見えて震えたのだ。瞳孔が一瞬引き絞られ、酷く怯えた色を浮かべる。

「…あ…」

沙慧の唇から零れた声が掠れて、震えている。竜は戸惑う。どうすればいいのかわからなくて、とりあえず頭をかいた。

「…えつと…？」

また、冷たい風が頬をなでていく。半袖の自分でも少し肌寒いのに、ノースリーブでワンピースの相手は大丈夫だろうかと心配になった。

風がふうとやんだ時、沙慧は震える声でぽつりと呟いた。

「…帰りたく、ない」

帰りたくなかった。あの、広い日本家屋。すべてで自分を拒絶する、人間。

沙慧は言ってから息を呑む。

今までは、耐えてきたはずだ。耐えて、何も感じないように努力してきた。

それが、今になって本音が顔を出す。

駄目だ。耐えなければいけないのに。今まで耐えてきたのに。耐えなければいけないのに。

「…じゃあ」

沙慧はハッとして、竜に焦点を合わせた。そして、目を睜る。竜の表情が、一変していた。

今までの気さくな印象を持たせるものではなく、とても冷たく、硬質な。

その表情のまま、竜は淡々と言った。

「一緒に来る？」

「…え？」

また風が吹いた。沙慧の髪が、夜の空気になびく。街の喧騒が一瞬、掻き消えたように感じた。

「一緒に来る？」

「…どこに？」

竜は微かに笑みを浮かべた。

「…ココじゃないトコ」

ここではない、どこかへ。

沙慧はうなずく。理性で考える前に、感情がうなずいていた。

「行く」

竜はふいににっと笑った。さっきまでの硬質なものは微塵もない、いつもの笑顔。

「よし。行こうか」

竜が手をさしのべてくる。沙慧は一瞬の躊躇ためらいもなく、その手に自分の手を重ねた。ゆっくりと、ベンチから立ち上がる。

ここではない、どこかへ。

二人は夜の公園を抜ける。暗い小路を通るうちに、街の喧騒が再び戻ってきた。

とくり。とくり。

心臓が鳴るのを、沙慧は止められなかった。

ただ、竜に手を引かれ、ネオンが無数に浮かぶ街の中を歩いていく。

ここではない、どこかへ。

第ⅤⅠⅠ話 夜に（後書き）

第ⅤⅠ話に続いて文章が拙く、申し訳ありません。

一生懸命書いているんですが、文章力の無さのせいか、語彙の少なさのせいか、うまく言葉をつなげることができなく…。最終話が見え始めたら、手直しをします。

お目汚し、本当にすみませんでした。

第VIIII話 灰色の場所

薄闇に沈んだ部屋。コンクリートが剥き出しになっているその部屋は硬質で冷徹な印象を与え、月の光が唯一の窓から差し込んでくる。

窓のすぐ手前に据えられたソファーに、榮は片膝を抱えるようにして座っていた。冴え冴えとした月光が榮をてらし、榮の周囲の空気を仄青くする。それはまるで一枚の絵。

抱えた膝に顔を埋めるようにして、榮は掠れた声で呟く。

「…ろ、や…」

それは、ひとりの青年の名前。榮の記憶に刻みついて消えない、呪縛にも似た想い。ただ甘いだけではなく、苦しみと痛みと虚無を伴う、深い想い。

唐突な出逢いと、甘やかな幸せと、唐突な裏切り。いつも底の見えない笑みを浮かべ、それでも腕の暖かさは本物だった。

ああ駄目だ。この時期になると、思い出す。

脳裏に浮かぶのは、青年の面影。もう二年近く前のことなのに、鮮やかに。

榮は硬く目をつむる。

はやく、はやく。

忘れる。

いくら想っても、もう逢えない。

忘れる。全部。

*

人混みを縫うようにして、竜が歩いていく。指先だけを繋いで、沙慧もそのあとをついて行く。

繋いだ指先の暖かさを不思議に思いながら、沙慧はふと思った。

これは、現実だろうか。

毒々しいまでの鮮やかなネオンに彩られ、追ひ払われた夜の闇。追ひ払われた夜の闇は光の届かないところに凝り、目が潰れそうなほどに濃い闇と化す。人はその闇に気付かずに、時間に急かされ擦れ違いを繰り返す。

一歩間違えば狂気と幻想の世界となる、東京。

そんな街を二人、泳ぐように歩く。これは現実？

かあさん。

その単語が、一瞬脳裏をよぎった。なぜだろう。

これは、逃げではないのか。

浮かび上がってきた問いかけ。逃げることを許されず、目を逸らすことを許されず、その生き方を自分は許容した。それなのに。今自分がここにいることは、逃げにつながりはしないか。

「高村？」

「ッ！」

ふいに、鼻先に暖かいものがぶつかった。

「わ…っ」

竜は驚いた。さつきから呼んでいたが返事がなく、身体ごと振り向きながらも一度呼んだのだ。その途端沙慧が胸にぶつかってきたものだから、反射的に、沙慧の細い背に腕を回しそうになる。

その間も、指先は繋いだまま。

驚いた。沙慧の身長は、竜のあと辺りまでしかない。小学校の頃は、女子との身長之差なんか無いに等しかったのに。

「…ごめん。何、水槻くん」

「ああ、…えっと」

繋いでいない方の手で軽く鼻を押さえながら、沙慧が離れる。竜は頭をかいいた。

特に意味はなかった。ただ、背後の沙慧が上の空らしかったので、大丈夫かと思っただけだ。

「いや、なんでもない」

早口で言ってから、沙慧に背を向けてもう一度歩き出した。沙慧もついていく。

夜の街を、二人で泳ぐように歩く。

竜は暫く歩いたあと、街を外れた。竜が無言のままだから、沙慧も何も言わない。

街を外れ、暗い小路をずっと行く。入り組んでいるその小路を竜は慣れた様子で歩く。

沙慧はゆっくりと辺りを見回した。きらびやかな街から抜けると、辺りは少しずつ寂れた雰囲気を持つ。築何十年もしそうなアパート、空き家が目立つようになり、街灯と街灯の距離が少しずつ開いていく。

この先に何があるのだろう。

今まで歩いてきた暗い路地を、ふと振り返る。

遠く、遠くの高い位置に、ビルの明かりが見える。規則的に並んだ窓から光が零れ、夜にそびえ立っている。ビルが、いくつも。

「高村？」

ふと我に返る。前に向き直る。竜がこちらを見ていた。

「…何？」

「いや。そろそろ着く」

行つて、竜は少し足を速めた。思いもよらないクラスメイトとの遭遇で、かなり時間に遅れている。榮が心配しているかもしれない。沙慧は一瞬目をつむる。意味はなかった。ただ指先のぬくもりを確かに感じ取るために、目をつむる。視覚を封じ、触覚を鋭敏にする。

けれどそれは本当に一瞬で、次の瞬間には沙慧は目を開けていた。竜が幾つ目かの角を曲がる。沙慧もその角を曲がり

突然、視界が開けた。

「…え？」

沙慧は声を漏らした。

突然ぼつかりと視界が開ける。中学校の校庭ほどもありそうな土地が、目の前に無造作に横たわっていた。夜のせいかな、その土地すべてが灰色に染まっている。

そして、その土地の奥にある、コンクリートが剥き出しの鉄筋製の建物。

「…これは？」

沙慧の問いに、竜は答えた。

「私立の学校か工場になるはずだったもの。つつても、建設途中に金出してたどつかのお偉いさんがどうになっちゃって、金が無くて造られかけのまま放棄された、中途半端な建物。今は俺らが存分に使わせてもらってるけど」

鉄筋製のその建物は、月の光を浴びてどこか不気味にそびえている。

沙慧は繋いでいた手を離し、ゆっくりと歩き出す。

竜はそれを、ぼんやりと見ていた。

土地の半ばまで沙慧が進み、立ち止まる。濃淡のある灰色だけで構成された景色に、レモン色のワンピースが鮮やかだ。

「……」

竜は、何かを言いかけるように唇を動かす。けれど、言葉は音にならず、空気に消えた。

少しうつむく。唇に、そっと指先を当てる。自分は、何を言おうとしたのだろう。

と、榮の横顔が瞼の裏に浮かぶ。

「…榮さん」

呟く。

今の榮は、情緒が少し不安定だ。閉ざしたはずの恋人の記憶が蘇り、恋人の幻影が榮を追い詰める。

竜は、ほんの少し笑みを浮かべた。

好きだったひとの記憶とは、もう逢えないのに焦がれずには
いられないひとの記憶とは、厄介なものだ。忘れようと、想いを閉
じようとする自分の理性を無視して、蘇ってくる。

笑みを消して空を仰ぐ。あのひだまりの少女は、空の上で微笑む
ことができているだろうか。

「…高村」

息をついてから歩き出し、沙慧を追い越す。追い越す瞬間名を呼
ぶことで、ついてくるよう促した。

後ろから沙慧がついてくる。その気配を感じ、竜は心持ち足を速
めた。

榮は、大丈夫だろうか。

建物の中は暗く、灰色の紗しゃを通して見えているようだ。一歩踏み出
すときの足音がかつ、かつ、と必要以上に大きく聞こえる。

前を歩く竜の背を、沙慧は見つめる。

この灰色の大きな建物に呆然と立っていた自分を、竜が追い越し
た。

追い越す瞬間に垣間見えた、硬質な表情。

あの表情の意味するものは、何なのだろう。

長い廊下。等間隔で並んだ窓から、弱々しい光が差し込んでくる。
それでも、人口の光源が皆無に等しいこの建物の中では、貴重な明
かりだった。

ふと竜の足が止まる。沙慧もそれに倣ならった。

廊下の突き当たり。少し大きめの扉がある。

「…悪い、高村、そこで待ってて」

竜は沙慧を首で振り返り、言う。沙慧は微かにあごを動かした。
それをうなずきだを取り、竜は扉のノブを手のひらで包み込む。
大きく息を吸ってから、扉を細く開けた。

扉からまっすぐの位置にある窓。窓のすぐ手前のソファー。
榮が、いる。

ソファーに座り、片膝を抱えて。抱えた膝に顔を埋めるようにして、微動せずにそこにいる。

窓から差し込んでくる光が榮の周りの空気だけを青くし、幻想的といっても良いほどの雰囲気をつくりだしていた。

竜は沙慧に部屋の中を見せまいとするように、細く開けた扉の隙間に身を滑らせる。ちらりと沙慧を見やり、もう一度悪いと視線で伝えてから、扉を閉めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0729e/>

東京マヨイガ

2010年10月16日00時34分発行